

2021/08/01

ルカ 12 章 13-21 節

神の前に富む者となる

12:13 群衆の中のひとりが、「先生。私と遺産を分けるように私の兄弟に話してください」と言った。12:14 すると彼に言われた。「いったいだれが、わたしをあなたがたの裁判官や調停者に任命したのですか。」12:15 そして人々に言われた。「どんな貪欲にも注意して、よく警戒しなさい。なぜなら、いくら豊かな人でも、その人のいのちは財産にあるのではないからです。」12:16 それから人々にたとえを話された。「ある金持ちの畑が豊作であった。12:17 そこで彼は、心の中でこう言いながら考えた。『どうしよう。作物をたくわえておく場所がない。』12:18 そして言った。『どうしよう。あの倉を取りこわして、もっと大きいのを建て、穀物や財産はみなそこにしまっておこう。12:19 そして、自分のたましいにこう言おう。「たましいよ。これから先何年分もいっぱい物がためられた。さあ、安心して、食べて、飲んで、楽しめ。」』12:20 しかし神は彼に言われた。『愚か者。おまえのたましいは、今夜おまえから取り去られる。そうしたら、おまえが用意した物は、いったいだれのものになるのか。』12:21 自分のためにたくわえても、神の前に富まない者はこのとおりです。」

皆さんには、お気に入りの物がありますか？持っていてただ幸せなものです。人生のうちで一番大切なものは何かとお聞きしているのではありませんよ。人生で一番大切なものは家族や信仰だとおっしゃるかもしれません。けれども私がお聞きしているのはそういうことではありません。あなたの所有している物の中でお気に入りのものを考えてみてほしいのです。私にとっても大変特別なものがいくつかあります。例えば（市場ではほとんど価値がないようなものなのですが）持っていることに誇りを持っている本がいくつかありますし、ノイズキャンセリング機能付きのヘッドフォンも大好きです。こういった物が与えてくれる気分や可能にしてくれることのゆえに私にとって特別なのです。皆さんはどうですか？あなたのお気に入りの物は何でしょうか？それをもしもなくしてしまったら、どんな風に感じますか？私はお気に入りの物をなくすことで恐らく苛立ちを覚えるとは思いますが、人生を完全に壊してしまうようなことにはならないでしょう。皆さんは、もしもお気に入りの物がなくなったり壊れたりしてしまったら、すぐに代わりのを手に入れますか？それとも、しばらく悲しみに浸りますか？私が思うに、お気に入りの物をなくしてしまうことはほとんどの人にとっては苛立ちを覚えるような体験であっても、その気持ちで1日、2日以上無駄にしてしまうことはないのではないのでしょうか。事実、私たちが大好きだと思っている物というのは、表面的なものにすぎません。思い出がつまっていたり、その物があることで生活の効率が上がったりするのです。しかし、お気に入りの所有物が私たちの生死に関わるということはないのです。

けれども正直になってみれば、私たちもどれくらいの物や所有物を持っているかで他人と自分を比較して、もがく時があります。他の人が持っているものを見ると喜ばしく感じず、ただその人と同じようなものを持ちたいと思うのです。私たちよりも多く持っている人の方が幸せそうにも見えます。群衆の中からイエスに呼びかけた男性が思っていたことはそういったことなのかなと私は思います。兄弟が遺産を自分と分け合ってくれれば人生がもっと良いものになるのに、もっと自由にできる資産がありさえすれば、もっと気楽に簡単に生活できるのに、と思ったのかもしれませんが。

イエスの応答の部分を読むとき、私はこの応答が衝撃的で少しこっけいだと感じてしまいます。もちろんイエスの応答はなにより、この男性の心、そして私たちすべての心に切り込んでいるものだと分かるのですが。イエスは、地上の心配事の中にあっても、すべてのもののうちで最も価値があるものにもう一度焦点を当てるようにされました。つまり、神の前に富むということです。「神の前に富む」は、今日の中心聖句の最後の節から来ています。イエスが（私たちも含む）聴衆の注目がこの地上での悩みよりもむしろ天にある真実に向くようにされているのがわかります。今朝は、神の前に富むということはどういうことか、その疑問の答えを見つけましょう。私たちは、金銭的なものではなく、敬虔のうちに永遠と天に関わることに人生を費やしていくべきだという重要なポイントを皆で理解したいと思います。ではルカの福音書 12 章 13-21 節を見てみましょう。

できるだけ多くの物を得るのが人生ではない(13-15 節)

ルカの福音書 11-12 章で、イエスはイスラエルの宗教的指導者たちとやり取りをし、弟子たちと周囲を取り巻いて集まった群衆に教えています。ここは、イエスの人生の中でも比較的白熱した話が続く部分です。イエスはこの世代のイスラエルを、しるしを求める「悪い時代」と呼んでいます（ルカ 11 章 29 節）。イエスは弟子たちに、ファリサイ人の偽善について警告しています。ルカ 11 章 42-44 節では、ファリサイ人のことを「わざわいだ」とさえ言っています。「わざわいだ」と言われるときは、警告とのろいの中の意味合いがあります。そしてイエスはルカ 12 章 4-7 節で、からだを殺してもたましいを殺す力がない人間を恐れることはない、と弟子たちと群衆に大きな励ましを与えました。表面的にみるとあまり励ましになりませんが、神の目に私たちは大きな価値があるのだから、私たちがすることを究極的に支配する力を持たない者たちを恐れるな、と言ってイエスはその意味を明確にされました。これらの教えのただ中で、群衆の中の一人の男性が遺産に関して自分と兄弟の仲裁をするようにイエスに頼んだのです。イエスの時代にあって、この人がイエスに頼んだのは単純に自分にお金が渡るようにすることではなかったと仮定できます。家族の土地の一部、商売、もしくはその他の有形資産だったかもしれませんが。ローマの支配下では貨幣が一般的でしたが、遺産と言うと、無形で換金しなければならないものの方が多くありました。この状況の詳細が分かりませんので、この依頼の内容については推測することしかできません。この群衆の中の男性は、真剣だったのでしょうか。イエスを試していたのでしょうか、それとも冗談のようなつもりだったのでしょうか？ どうだったかは分かりませんが、イエスは彼の質問に答えることを拒否し、代わりに「いったいだれが、わたしをあなたがたの裁判官や調停者に任命したのですか。」と言われました。私は、この男性の質問が少なくとも 2 つの点でこっけいだと思います。まず、イエスは実際に、世を裁かれる方です。聖餐にあずかるとき、私たちはイエスが戻って来られて、世を裁かれるという信念を再確認しています。けれども、イエスが最初に世に来られたのは、遺産のことで兄弟間を裁く裁判官としてではありません。イエスは、世を贖うためにこの世に送られたのです（ヨハネ 3 章 16-17 節）。この質問がこっけいだと思うもう一つの理由は、イエスは、どの裁判官や仲裁人よりもこの兄弟の心の内をよく知っていたであろうということです。問題となっていたのは何なのか、兄弟それぞれの動機がどのようなものだったのか、イエスは完全にご存知だったはずですが。イエスよりも優れた裁判官はいませんでした。けれども、イエスは関わりあいになるのを拒否されました。けれども、15 節を見ると、イエスがこの男性の心ときちんと向き合っておられるのがわかります。イエスは彼に言われました。

ルカ 12:15 「どんな貪欲にも注意して、よく警戒しなさい。なぜなら、いくら豊かな人でも、その人のいのちは財産にあるのではないからです。」

このイエスの警告を、男性の心の中を見たイエスの洞察ととらえなくてはなりません。この男性は、遺産のいくらかを得ようと助けを求めました。するとイエスは貪欲が心に入ることを許さぬよう警告しました。そういう意味では、イエスは遺産に関して裁いて関わることを完全に拒否したのでは

ないと分かります。しかしイエスの応答は予期された方法ではなく、男性にどのような貪欲にもよく警戒しなさいと警告をお与えになりました。貪欲は、聖書の中では深刻なものです。が、いったい何なのでしょう？出エジプト記 20 章 17 節で【主】は貪欲についての次の戒めを与えています。

「20:17 あなたの隣人の家を欲しがってはならない。すなわち隣人の妻、あるいは、その男奴隷、女奴隷、牛、ろば、すべてあなたの隣人のものを、欲しがってはならない。」

聖書辞典のほとんどは、貪欲を「誰かの所有物に対する強い欲求」と定義しています。隣人の所有物を自分のものにしたというこの強い欲求は、あらゆる意味で有害です。例えば、マタイ 7 章 20-22 節で貪欲はその人のから出てくるもので、内側から汚すものだといエスは言われています。また箴言 15 章 27 節では、しきりに欲することは、ほしい物を得ようとする悪い道へと導き、家庭全体に恥をもたらすと教えています。貪欲とは深刻なものです。が、紙幣や大量生産の登場により、目に見えにくいものになっています。隣人が何か持っていたとすると、それを得るためには時間がかかり、得るための手腕も必要だっただろうと思う時代もありました。けれども今は異なります。誰かが何か持っているのを目にしたら、それがどこで買えるのかが分かりさえすれば自分のものにできるのです。そういう意味で、ピカピカの新しい何かを目にして、それに似たものを欲しがることは貪欲ではありません。自分がそのようなものを欲しがっていると思っはいなかったとしても、それを目にした時に「これがあればすごくいいだろうな」と思うのです。それを盗もうと計画を立てたり、今所有している人から所有権が自分に来るように仕向けたりすることとは違います。誰かの所有物に対する強い欲求は、生産方法が変化したことと特に変わったわけではありません。それは、もっともっと欲しいと言う熱望です。貪欲の本質は、他人と同じものを持つことで満足を得ようと求める考え方です。神は隣人の家を欲してはならないと言われましたが、引き続き隣人の妻を欲してはならないということとその意味を説明しています。貪欲に関しての戒めは、物的所有物と同じ程、他の人のようにになりたいという欲求にも適用されます。つまり、他の人が持っている物を持って、彼らがしているようなことをしたいと望むのです。人生は預金残高や高級品、社会的地位など、どんな個人の所有物の豊かさによっても成るのではないといエスは男性に教えました。この時点では、イエスは男性に警告だけを与えています。が、続けてより深く、より真実な人生の目的について考えるべくたとえ話をされました。

愚かな金持ちのたとえ話（16-21 節）

イエスは度々たとえ話をういて群衆を教えられました。一つのたとえ話は短く、偉大な霊的真理との類似点を見ることが出来る端的な話です。どのたとえ話も具体的部分は理解しやすいのですが、時に霊的真理は少し不明瞭で判断が難しいこともあります。それはなぜかと言うと、私たちが同じ問題に直面することがないことや、イエスの時代の人たちが普段使っていたものを使っていないからでしょう。例えば、ぶどう酒を入れる皮袋についてのたとえ話は、皮袋がもう使われていないために私たちにとって馴染みのないものです。イエスはまた霊的真理を覆い隠すようにしてたとえ話で教えられました。イエスはマタイ 13 章 14 節で旧約聖書を引用しています。

マタイ 13:14 「.....『あなたがたは確かに聞きはするが、決して悟らない....』」

たとえ話の中には、その解釈がそこに含まれたものもあります。ルカ 12 章 16-21 節に見られるのがそれです。遺産を兄弟から分けてもらいたい男性とイエスとのやり取りは、イエスの教えの基本的部分として働き、また今日の中心聖句の最後の節は私たちを帰るべき真理へと導いてくれます。

「ある金持ちの畑が豊作であった。...」ここでは、ある金持ちがより豊かになるたとえ話がされています。非常に多くの収穫があったので文字通り自分の倉に収める場所がなくなりました。

この有り余る収穫物をどうするか考えなくてはなりませんでした。彼の決断は筋の通ったものに見えます。それはもっと大きい倉を建てることです。私は農業にそんなに詳しいわけではないですが、成功している時には経営を上げられるようにしたいと思うものでしょう。私たちには、この金持ちに対して嫉妬したり、批判的になってしまったりする誘惑があるかもしれません。お金持ちがより富むならば、その人は恵まれていない人たちを助けるべきであるようにも思えます。皆さんの中には、この箇所を読んで「この金持ちは余剰分を貧しい人に寄付したり、少なくとも全部非常に安い値で売ったりして他の人を助けることもできたのでは」と思う方もいるかもしれません。彼が寛大な金持ちであればどれほど違ったかわからないのですが、とにかくこの金持ちの性格はあまり説明されていません。ここで教えられているのは、ただ彼には有り余るほどの収穫があり、より大きい倉を建てたいと思っていたことだけです。商売を大きく、より良くしたいと思う衝動は理解できるのではないのでしょうか。自分の利益と発展を保持することは商売の基本原則です。

このとても短いたとえ話は細かなことを教えてはいませんが、ルカ 12 章 16-19 節の金持ちの罪は、寛大さに欠けていたことではないと思います。彼の問題は、自分の所有物で満足していたことでした。彼は自分のたましいにこう言いました（この部分がこのたとえ話を理解する上で非常に重要です）。「必要なものは全部手に入った」と。主イエスによって明らかにされた彼の心の会話が示していることは、今持っているもの以上にもう何も必要ないと彼が思っていたことです。彼は、まるで多くのもものさえあれば自分の命を守り必要を満たすことができるというように振舞っていたのです。彼は、生死や将来は自分の権利の内にあるかのように言いました。これが貪欲の生きた描写です。この金持ちは、人生で大切なことを全て完全に忘れてしまっていたのです。彼は、自分の人生を長くすることも、そして実際短くすることもできないことを忘れていました。彼は自分の穀物が翌年にはどうなるか決めることすらできません。嵐や干ばつが彼の収穫を完全にダメにしてしまうかもしれません。一つの災害があるだけで彼も貧しくなるかもしれないのに、自分には多くの富があるからすべての力があると思っていたのです。この地上にあるどのような富でも、災難を逃れることはできません。富んだ人は高いものを購入することができたり、長期休暇に出かけたりして快適な生活を送れます。けれども、どんな努力をしても、彼らも死を免れることはできません。この金持ちは、富が彼にゆったり飲み食して幸せになる権利を与えてくれたと言っています。彼の築き上げたものがすべて続くのですから、彼も続くはずですね。ですが、神はこの男性を愚か者と呼び語りました。神がこの男性は愚か者であると言ったのは、彼が自分のたましいに「十分すぎるものが何年分もたくわえられた」と言ったからです。彼は自分の人生の重要な部分を欠けていました。彼は自分を取り囲むものを見て満足する一方で、自分が自分のものでないという事実を無視しているのです。彼は自分の命を所有していません。自分の月日を長くすることもできません。私たちにとっても同じです。どこで生まれるかも自分ではどうしようもなかったのと同じように、いつか死ぬという事実も変えることはできません。

明日死ぬと分かっていたら、この 24 時間をどのように過ごしますか？時間いっぱい出かけて、できるだけ楽しい経験をすると言う人もいます。この 24 時間精一杯生きてできるだけことはしますから後悔無く死ぬことができるというのです。このたとえ話で主イエスは、意味のある人生とは本当は何なのかということに私たちの注意を向けています。それは、豊富な物質的所有物でも、人生でできるだけ多くを得ることでありません。30 年、60 年、90 年もしくはもっと長く生きようとも、それは関係ありません。いつか、私たちが蓄えたものは他人に分け与えられ、私たちの役に立つことはありません。私たちは生から死へと移るからです。神はこの金持ちに言いました。

「今夜、おまえの命は取り去られる。お前が用意したものは一体誰のものになるのか」と。であれば、私たちの義務は、何かもっと真実で、崇高なことのために生きることです。私たちが励んで生きるべき、より真実で、もっと崇高なこととは何でしょう？イエスは 21 節で、それが「神の前に富んだ者となる」ことだと言われました。「神の前に富んだ者となる」ということを理解するため

の中核は、神はどんなにたくさんの富よりも価値があるという事実です。神の知識と多額のお金という選択肢があったら、あなたはどちらを選びますか？もちろん、今の世でお金は価値のあるものです。けれども、この世のすべてのお金があっても、それは永遠のいのちを与えません。日本の慣習では死後、遺体を火葬します。どんなに入念に作られた骨壺でも、人生で蓄えた富をそんなに入れ込むことはできません。死は、権力と富がある者と残りの者を平等にするものです。この地で物を持っていること自体は、たとえそれがたくさんであっても悪いことではありません。私たちが何のために生きているのかが一番重要な部分です。周囲を見回して「隣人が持っているものを持っていたらどんなに良かったか」「もっとお金があったら、もっと物があったらもっと幸せになれるのかな？」と思ったことがありますか？貪欲とは、油断のならない罪です。目に見えることもあれば、心の奥深く隠されていることもあります。子どもの場合は目に見えて明らかなことが多いです。子どもは、他の子どもがおもちゃを持っているのを見ると、誰がそのおもちゃで遊ぶのかを巡ってけんかをします。大人はそうではありません。私たちは自分の感情を隠すことに長けています。他の人の成功や所有物を見てその人のようになりたいと強い欲求を持ちます。あの人が持っている物が欲しい。普通はそれに対して何もしません、ピリピリとしたものを感じるものです。ルカ 12 章の次の部分でイエスは引き続きこの誘惑と戦うことに関しても教えられました。イエスは弟子たちに、神は自然界を気にかけて世話をなさると教えています。そして「あなたの宝があるところにあなたの心もある」と言われました。簡単なことではないかもしれませんが、あなたの宝がどこにあるのか是非考えてみてください。あなたは何のために生きていますか？他の人に認められるためですか、もしくは他の人から裁かれることへの恐怖の中に生きていますか？贅沢な休暇や老後の安泰を夢見ていますか？より良いものを得る人生にしたいと思っていますか？寛容にあつて自分は成長していますか、それとも自分の時間やお金を手放すことに苦戦していますか？「神の前に富んだ者となる」ことは、永遠という天における真実とイエスの福音に心を留めることです。神に関わることに目を向け、それを価値あるものとするのです。私たちは、隣人が励んで求めているものと比べてそれがいかに貴重なことであるかを知っているからです。この世が役に立たず価値のないものだとは思ってはなりません。神は私たちが生きる命を与えてくださいました。この地で喜びを持つこともできます。けれども、私たちの持つ喜びはキリスト・イエスにあつて蓄えられたより大きくより素晴らしいもののゆえに、より深い喜びでなければなりません。誰にとっても人生が難しいことがあります。さらには、クリスチャンとして容易な人生が約束されているわけでもありません。むしろ、クリスチャンになったことでより難しくなったことさえでしょう。日々の仕事や責任が重くのしかかっているかもしれません。けれども、クリスチャンには天の宝が保証されています。それは金銀ではありません。ヨハネの黙示録を読んだことがありますか？金で舗装された道があり、海は水晶のようで、宝石がいたるところにあります。素晴らしい豪華な生活がクリスチャンに用意されているように聞こえる一方で、私はこれが本当に意味しているのは、今価値があるすべてのものが、天では私たちの足元にある地面のように価値のないものとなるということだと思えます。本当の宝は、イエスを通して神の家族として受け入れられ（ガラテヤ 3:23-4:7）、子羊の婚宴に迎え入れられる（ヨハネの黙示録 19:6-10）ということです。人々をご自分の所有として贖われた後で、イエスは天へと上られました。私たちはイエスの再臨を待ち望んでいます。再臨を待つ間に、この地でイエスにお仕えするのです。これもまた、クリスチャンだけが楽しむことができる宝です。もし自分がクリスチャンかどうかわからなかったり、洗礼を受けていなかったり、クリスチャンの信仰についてどの考えるべきかわからないという人は、礼拝後に私か OIC の教会員のところに来てください。きっと皆力になってくれますし、力になれる人を探してくれるでしょう。クリスチャンの皆さん、神に関わることに注意を向けましょう。善を行うのに飽いてはいけません。絶えず祈りましょう。主にお仕えしましょう。主の栄光に満ちた恵みの御業を世に告げ知らせましょう。イエスに目を向け続けましょう。